

1930年代における Ernest Hemingway

宮 田 満 雄

米国における1930年代は、1929年の大恐慌のあとをうけて大きな社会不安の真唯中に始まった。1920年代の後半に *In Our Time* (1925) と *The Sun Also Rises* (1926) によって作家としての華々しいキャリアを開始した Hemingway にとって、1930年代は、1929年に出版された *A Farewell to Arms* によって得た先の二作をはるかに凌ぐ名声をより確固たるものにすべき重要な時期にあたっていた。1928年に父親が自殺し、又、最初の妻 Hardley との離婚と Pauline との再婚という彼自身の身の回りの大きな変化はあったとしても、1930年という年はバリからキー・ウェストへもどって来ることから平穏な内に始まった。しかしながら、この10年間は20年代とは別の意味で彼にとっては変動の多い、又、悩みの多い時期となった。この小論は、問題の多かった30年代の彼の姿を浮き彫りにしようとするものである。

I

先ずこの10年間、最も目につくのは異常とも思える彼の出入りの激しさである。彼はほとんど本拠地のキー・ウェストに腰を落着けて創作活動を行なうことがなかったように見える。仮に本拠地に居たとしても千客万来であり、その度に釣に出かける有様で、まさに Hemingway にとっては、
 “For guys like us home was a place a man left behind him in order to come back to it afterwards.”¹⁾ であった。彼の旅行先の主な国は、スペイン、アフリカ、フランス、キューバであり、国内ではワイオミング、ニューヨーク、アイダホ州のサン・ヴァレーである。スペインへは1931年5月を皮切りに、1933年、1936年のスぺ

イン内戦勃発も手伝って1937年には2回、1938年にも2回と計6回出かけている。1933年には待望のアフリカへ狩猟旅行に行った。

この旅行は、もともと1930年の春に計画されたものであったが延期になっていたものである。又、彼はしばしばモンタナ州に近いワイオミングの農場に出かけ、そこを拠点にして釣や狩猟を行なった。この10年間は負傷や病気の方も盛んであった。その最初は、1930年5月キー・ウェストにおいてパンチング・バッグを用いて拳闘の練習をしている最中に人差し指を負傷したもので、骨が見えており6針縫った。彼はすでに *Death in the Afternoon* の草稿作製にかかっていたが、この負傷のために作品の進行が遅れることとなった。更に同年11月、6月初旬よりキー・ウェストの蒸し暑さを避けて出かけていたワイオミングの農場からの帰途、自動車事故にあい右腕に複雑骨折の重傷を負った。負傷したのが11月1日でありクリスマス近くまでモンタナ州の病院で過ごす羽目となった。この時の入院の体験から、後に “The Gambler, The Nun, and the Radio” を発表した。ワイオミングの雄大な自然の中で好きな狩猟と釣の醍醐味を満喫した帰途であっただけに彼の落胆は大きく、又、この事故によってもたらされた *Death in the Afternoon* の進行の遅れは彼の焦躁感を深めた。翌年キー・ウェストにもどった後も負傷した腕のために十分な仕事はできなかったが、相変らず千客万来で、Baker は、
 “Even with a good right arm, Ernest’s productivity might have been seriously limited by social engagement.”²⁾ と述べている。Hemingway は、この年の春に結婚生活10年にして初めて自分の住

1) Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story*, Scribner’s Sons, New York, 1969, p. 225.

2) Ibid., p. 220.

居を購入することになる。

1932年4月、ハヴァナでの65日間の釣休暇のために、キー・ウェストを離れた。しかしその帰途、激しいスコールに会ったのが原因で肺炎を起こし寝込むことになる。1933年はアフリカへ狩猟旅行に出た年であったが、アフリカで年の暮から翌年初めにかけて激しいアメーバー赤痢にかかり、狩猟を中断してナイロビの病院に入院しなければならなかった。この時のナイロビへ後送される体験は、後の“The Snows of Kilimanjaro”に描かれている。

1938年1月、スペインからもどって来た頃、肉体的には肝臓障害にかかり、精神的にはスペイン内戦の問題、彼に対する特派員としての評価の問題、冷えきった夫婦間の問題などが重なり合い不安定な時期を過ごすこととなる。同年8月、キー・ウェストの暑さを逃がれるため、例によってワイオミングへ家族と共に車で行く途中、瞳孔を痛め二日間 モーテルで 静養しなければならなかった。

肉体的な健康にさまざまなことが起こった時期であったが、それにも増して彼の精神的なストレスからくる疲労は激しかった。この10年間における彼のストレスの原因として次の三つの要因が考えられる。第一は彼に対する批評界の評価である。第二は大恐慌やスペイン内戦などによって強められてきた作家の政治的立場の問題。そして最後は Martha Gellhorn との出会いに端を発した彼の家庭問題である。

II

1925年の10月に出版された *In Our Time* は概して好評であり、Hemingway としては作家として好調なすべり出しを見せたと言ってよいであろう。続いて翌年出版された彼としては最初の本格的な小説 *The Sun Also Rises* も好評であり、本格的な小説家としての彼の才能が世に認められたわけである。もっとも、作中人物にはそれぞれそれとわかるモデルが居たためにモデルとして使われた人物達の間では物議をかもしたことであ

た。しかし、この小説が若者達に与えた社会的影響は大きく、彼等のライフスタイルを変えたと言われる程であった。

しかしながら、1927年に出版された短編集 *Men Without Women* に関しては先の二作のようなわけにはいかなかった。*New York Herald Tribune* の日曜書評欄に掲載された Virginia Woolf の批評は彼に衝撃を与えた。Woolf は、Hemingway の率直で大胆な点、又、彼の技巧などを認めつつも彼の「男性らしさ」に対する関心があまりにも自意識過剰であり、彼の折角の才能が成長していくよりも、むしろ偏狭になっていると指摘した³⁾。他の批評家達も Hemingway の世界が狭く小さい点、闘牛士、拳闘家、娼婦、酒飲み、兵士など大衆的で粗野な人々にあまりにも固執しすぎている点などを批判し、安物のアブサン酒のようであると評した。又、Hemingway の問題点は、彼が文学理論に欠ける点であることが指摘され、彼が本質的には作家であるよりも、むしろ報道記者であると評した⁴⁾。Hemingway という人物は、一見豪放磊落に見えるが、非常に神経質な面を持っており自尊心は人一倍強い人物であった。従って、これらの批評はかなりこたえた模様で、当時、批評を気にして自由にペンが走らない位であったと言われている。後に出た *Green Hills of Africa* (1936) にはこの点に関する作家と批評家の関係についての言及がある。

しかしながら、彼はこの頃すでに長編小説の第二弾に意欲的にとりかかっていた。これが *A Farewell to Arms* であって1929年9月に出版された。当時、Hemingway はスペインでの休暇を終えパリにもどって来ていた。Perkins は9月28日に“FIRST REVIEWS SPLENDED PROSPECTS BRIGHT”⁵⁾と電報を打ち、この小説の好調なすべり出しを作者に知らせた。*New York Times* の中で Hemingway の専門家と言われていた Percy Hutchinson は、“the story of the love between the English nurse and the American ambulance officer, as hapless as that of Romeo and Juliet, is a high a-

3) Cf. Ibid., p. 187.

4) Cf. Ibid., p. 187.

5) Ibid., p. 204.

chievement in what might be termed the new romanticism.”⁶⁾と述べ、又、Clifton Fadiman は、この作品を “the very apotheosis of a kind of modernism”⁷⁾と称した。全体としては Hemingway のこれまでのどの作品に対するより積極的な支持と称賛が批評界において示されたと言ってよい。この作品は約1カ月の間に28,000部が売れ、11月にはベストセラーとなった。後には大統領の図書の中に含まれることとなる。1929年は大恐慌の年であり、社会は経済的な不安の唯中にあったが、Hemingway はこの作品が大成功をおさめたことにより経済的には十分な恩恵をうけて1930年代に臨むこととなった。又、この作品に対する好意的な批評の背後には、Malcolm Cowley がいみじくも “farewell to a period, an attitude, and perhaps to a method also”⁸⁾と述べたごとく、この作家がこれまでの偏狭な自分の殻から脱皮して、更に一段と大作家としての飛躍を遂げることが期待されていたのである。Hemingway にとっては、1920年代は実に華々しい成果をもってその終止符とし、新しい期待のうちに1930年代の幕明けを迎えたわけである。30年代に入って最初に世に出た彼の本は *Death in the Afternoon* (1932) である。彼がこの作品に関する構想を持ったのは1925年頃にまで遡ると言われているが、その構想は “a big book with wonderful pictures”⁹⁾ というもので、好きな闘牛について余すところなく書きあげるところにあったようである。闘牛に関しては *In Our Time* にもそのスケッチがでてくるし、又、*The Sun Also Rises* にも闘牛と闘牛士についての言及は重要な部分として登場しているが、闘牛そのものに関してまとめたものとして最初に出たものは1930年3月、*Fortune* 誌に掲載された “Bullfighting, Sport and Industry” であろう。*Death in the Afternoon* はこれを更に充実させた形にして完成したものである。

この本の最初の構想は純粋に闘牛の解説書とす

ることであったのかも知れないが、周囲の状況から初めの構想からはかなり変った性質のものになったことが想像される。それは、彼がこの作品の中にこれまでになく彼自身の作品論、作家論を挑戦的な調子で盛り込んでいるからである。

.....while a major art cannot even be judged until the unimportant physical rottenness of whoever made it is well buried.....But there is sometimes a long time between great ones and those that have known the former great ones rarely recognize the new ones when they come.¹⁰⁾

If a writer of prose knows enough about what he is writing about he may omit things that he knows and the reader, if the writer is writing truly enough, will have a feeling of those things as strongly as though the writer had stated them..... A writer who appreciates the seriousness of writing so little that he is anxious to make people see he is formally educated, cultured or well-bred is merely a popinjay.a serious writer is not to be confounded with a solemn writer.....a solemn writer is always a bloody owl.¹¹⁾

又、全体の調子は闘牛弁護論というよりも、むしろ、闘牛に対する偏見を持つ人々を嘲弄するほど誇示的なものである。

Perkins は Hemingway に対して出版社としては出だし好調と知らせたものの、*Death in the Afternoon* の評価は、3年後ぐらいにはかなり好意的なものに変わっていくが、当初は期待が裏切られた事もあり、又、作者自身の挑戦的、且つ、嘲弄的態度が祟った為かかなり手厳しいものであった。

One reviewer called it childish “in its small-boy wickedness of vocabulary,” and morbid “in its endless preoccupation with

6), 7) Ibid., p. 204.

8) Ibid., p. 204.

9) Ibid., p. 209.

10) *Death in the Afternoon*, Jonathan Cape, London, 1963, pp. 98—99.

11) Ibid., p. 183.

fatality.”¹²⁾

.....his celebrated clarity of style had been vitiated with occasional obscurities, while his “he-mannish” posturing was becoming a bore.¹³⁾

H. L. Mencken は、一方でこの作品が闘牛の解説書として秀れていることを認めつつも、Hemingway がこの作品で自らがいかに “naughty fellow” であるかということを誇示している点は陳腐に過ぎると述べた¹⁴⁾。又、Robert M. Coates は、*The New Yorker* に掲載された評論の中で、この作品を “a bitter book” であるとし、“the work of a romantic who refused to embrace the idea of death as the end and complement of life.”¹⁵⁾ と皮肉な調子で定義づけている。

1933年6月に、遅れて *New Republic* に掲載された Max Eastman の批評は Hemingway を激怒させ¹⁶⁾、この凝りは後にまで残り4年後には大立ち回りの派手な喧嘩をすることになる。

1933年10月、第三の短編集 *Winner Take Nothing* が “to make a picture of the whole world”¹⁷⁾ という構想のもとに出版されたが、

“His autumnal gloom was deepened by a new outbreak of hostility among the New York reviewers,.....”¹⁸⁾ と言われるように、彼にとっては不本意なものであった。Clifton Fadiman の “Ernest had developed his stories about sport and sudden death to the saturation point. Why did he not now go on to something else?”¹⁹⁾ という言葉は批評家達の方の空気を伝えるものであった。厳しい批評の裏には *A Farewell to Arms* の作者に対する大きな期待が裏切られたという面もあったと考えられ

る。Hemingway は Fadiman に対して個人的な返事を送り、その中で、「自分はあくまでも頑張り続けて、今自分を厳しく批判している奴らを片っぱしから引ずり降ろしてやる。そうなければ Eastman を手はじめに2年毎に気に入くない批評家の顎をかちわってやる。とにかく、自分の気に入ったことをして楽しむのが自分の主義である。」と書いたと言われている²⁰⁾。後に Scott Fitzgerald をして “completely lost his head”²¹⁾ と言わしめた Hemingway の傾向はすでにこの時からあったようである。

1935年10月にはアフリカでの自らの体験をまとめた *Green Hills of Africa* が出た。Hemingway はこの作品の草稿を1934年の11月に完成した時その出来栄に満足していた。その質において “Big Two-Hearted River” に類似したものであると感じた。つまり、彼が言う “landscape painting” の手法によって生き生きとした景色の描写がなされており、又、彼の口癖であった「まやかし抜き」の作品ができたことに満足をおぼえていた。しかしながら、発表されたこの作品に対する批評は好意的なものもあったが、大勢は不評で、Hemingway に対しては好意的であった Edmund Wilson でさえも “the only really weak book”²²⁾ と述べ、又、Bernard DeVoto の評は “a pretty small book for a big man to write”²³⁾ と言うものであった。

この作品においても、Hemingway は先の *Death in the Afternoon* におけるのと同様、彼自身の文学論、作家論を織り込んでいる。Kandisky との会話においてアメリカ文学を語り、木蔭でトルストイの「セヴァストポール」を読みながらこの偉大な作家への傾倒を示し、キャンプでの食事の後、又、キャンプファイヤーを囲みなが

12) *A Life Story*, p. 234.

13) *Ibid.*, p. 234.

14) *Ibid.*, p. 234.

15) *Ibid.*, p. 234.

16) Cf. *Ibid.*, pp. 241—243. 両者の喧嘩の事情は p. 317 参照。

17) *Ibid.*, p. 241.

18) *Ibid.*, p. 246.

19) *Ibid.*, p. 246.

20) Cf. *Ibid.*, pp. 246—247.

21) *Ibid.*, p. 290.

22), 23) *Ibid.*, p. 281.

ら彼の文学談義は続く。その最も中心となる点は彼の新しい散文文学への志向という点であろう。それは困難な故に誰もが避けようとしている問題であり、四次元、五次元の世界を目指すものであった。

Hemingway にとって30年代前半は批評家との関係が最も悪かった時期であると言えよう。彼自身のスランプも手伝い、辛苦の時代とすることができ。"Hemingway's best antidote to the animadversions of the reviewers was big-game fishing"²⁴⁾と言われるように、彼としては釣や狩猟に出かけなければやりきれない日々であったわけである。彼はしばしば自らの鬱憤を周囲にぶつけた。Fitzgerald もかなりやられたが、10年来の親友であった Archie MacLeish と喧嘩することになる。彼は Hemingway を称して "He was a wonderful, irreplaceable, but an impossible friend; a man you couldn't get along with, a man you couldn't get along without."²⁵⁾ と述べ、彼の難しい性格を表現している。Gertrude Stein との関係も今や陰悪なものとなっていた²⁶⁾。

Ivan Kashkeen は、"Ernest Hemingway: The Tragedy of Craftsmanship" というエッセイの中で、Hemingway の隠された部分に精神不安定、神経症的な症状があることを指摘した²⁷⁾。事実、1936年の1月には3週間にわたり不眠症と憂鬱症にかかった。思い通りに作品を書くことができないことが大きな理由であった。彼は結局、作品の量は半分に減らしてもよいからストレスを解消することに専念したほうがよいと考えるに至る。釣や狩猟をしていれば問題はないのであるが、Hemingway にとっては先の Kashkeen に洩らしたように、「思い通りに書くことができない」という点が最も深刻な悩みであったのである。

III

1929年の大恐慌は、文壇の傾向にも大きな影響を与えずにはおかなかった。作家も傍観者たることは許されず、社会的現実を描くことが期待され、"those who want to save the world"²⁸⁾ と Hemingway が皮肉った人々が増加し、Malcolm Cowley や Edmund Wilson などこの傾向を示した。従って、30年代前半において、いわゆる進歩的批評家達は、Hemingway のような有名作家は当然自分達の戦列に加わるべきであると考え、釣や狩猟や旅行にうつつを抜かしているかに見受けられる彼を非難した。この時期の Hemingway 批評にはこのような時代的気運がその背景にあったことを忘れてはならない。

Hemingway は大の政治嫌いであった。彼によれば作家には右も左もなく、唯あるのは "good and bad"²⁹⁾ の問題のみであった。彼に言わせれば、Dreiser が左傾したのは自らを救うための哀れな試みにすぎなかっただけであるということになる³⁰⁾。とにかく、彼の政治嫌いは、「することをしないで政治のことばかり言う奴は喜んで機関銃で撃ち殺してやる。」と言う位のものであった。又、ある時には、政治のことを聞くよりもコヨーテの遠吠えを聞く方がましだとも言い、政治のことよりははるかに真面目になって Pauline を教会へ送って行ったりした。

彼には様々な形で左翼系の戦列に加わるよう要請があった。1935年12月には *The American Criterion* 誌に Abner Green による Hemingway 宛の公開書簡が掲載された。その中で Green は、Hemingway の文学的テーマを批判し、彼のような第一人者として認められている作家の扱うテーマは動物や大魚ではなく、より重要なテーマであるべきであると述べた³¹⁾。Hemingway は、作家のなすべき務めは社会的貢献を果たすことではなく、いかにして優れた作品を書くかとい

24) Ibid., p. 243.

25) Ibid., p. 262.

26) Cf. Ibid., p. 267.

27) Cf. Ibid., p. 277.

28) *Death in the Afternoon* p. 261.

29) ,30) Cf. *A Life Story*, p.226.

31) Cf. Ibid., p. 281.

う点にあるという自論を維持しつつも、次第に時代の圧迫に抗し切れず、彼の作品にもその影響があらわれて来た。その最初は1936年2月の *Esquire* 誌に掲載された *Harry Morgan Story* の第二部、“*The Tradesman’s Return*”においてであった。しかしながらこれとて、プロレタリア文学と言うには程遠いものであり、*Baker* の言葉を借りれば “*the thinnest of thin red lines*”³²⁾ と言う程のものであった。しかしながら、*Hemingway* のこれまでの頑強な政治嫌いを考慮に入れると、この程度のもでも左翼シンパの批評家者を安堵さすのに十分なものであった。

1936年7月、スペイン内戦が始まった。その前年の後半から、彼はしばしば周期的に憂鬱症と誇大妄想に陥り、かならずしも精神状態は安定していなかった。8月には恒例のワイオミング行きを果たしたが、スペインのことが気にかかり、又、彼自身の精神状態も不安定で、*Mrs. Rawlings* や *MacLeish* には自らの死について手紙を書き送っている。特に *MacLeish* には自殺のことにに関して書き記しており、このことは彼自身の死と考え合わせると興味深いところである³³⁾。10月にはキー・ウェストにもどったが、暮に *James T. Farrell* と *Roosevelt* のブレーンの一人である *Rexford Guy Tugwell* が訪ねて来た。彼は *Hemingway* に小説の材題として政治的な趣きのものを扱うことに関して話題を向けたが、政治向きの事には関心を示さず、*Tugwell* は、“*I thought then that he was getting himself into a situation with diminishing resources*”³⁴⁾ と述べ、*Hemingway* のスランプを感じ取っている。

1937年、*North American Newspaper Alliance* (NANA) の特派員となっていよいよスペインへ行くこととなった。彼の立場は、あくまでもその基本において人道的なものであり、イデオロギー的な要素は少なかった。皮肉な見方をすれば、戦争という状況が彼を招いたとも言える。行動を求める彼にとっては、将に、願ってもない機

会だったとも言えるわけである。内戦に関する記録映画製作に関しても、*Dos Passos* は内戦下における民衆の苦境に重点を置こうとしたのに対して、*Hemingway* は軍事的情勢の推移にその重点を置こうとして両者は喰い違ったと言われている³⁵⁾。

45日間のスペイン滞在の後、5月に帰国し、6月4日には第二回全米作家会議において「作家と戦争」と題して彼としては初めての公式演説を行った。彼は作家のなすべき務めを説き、更にファシズムを痛烈に批判した。「政治嫌い」で通っていた *Hemingway* の演説は、彼の転向を示すものとして非常に大きな感銘を聴衆に与えた。

スペインにおいては、映画「スペインの大地」の製作に従事し、この映画は当時の *Roosevelt* 大統領夫妻も鑑賞することとなった。又、この年の10月には *Harry Morgan Story* として1934年4月に *Cosmopolitan* 誌に掲載された “*One Trip Across*” と、先述の “*The Tradesman’s Return*” をまとめて *To Have and Have Not* として出版するなど活躍した。この作品は、従来の作品と異なり主人公に社会的な枠組を与えようとしたものであったが、その評価はまちまちであり、どちらかと言えばあまり芳しいものではなかった。

彼は結局内戦の間に4回スペインへ渡った。様々な活躍をしたが、特派員としての記事の内容は、彼が1920年代に *Toronto Star* に送ったものと比べてその質は劣っていたと言われている。スペイン内戦に関った経験は決して後味の良いものとはならなかった。それは、政治の世界に見られる腐敗と裏切り行為の繰返しに失望したからであった。スペイン自身に対する彼の態度も変った。それは丁度 *Pauline* との仲が冷えて行くのと平行して起こった彼の心境の変化であった。彼としては、きたない政治からは手を引いて、作家としての本来の仕事にもどるべきであると考えたのである。

IV

30年代後半の *Hemingway* の生活に喜びと同

32) Ibid., p. 282.

33) Cf. Ibid., p. 293.

34) Ibid., p. 297.

35) Cf. Ibid., p. 300.

時に苦悩をもたらしたものは **Martha Gellhorn** との出会いであった。彼女はセントルイスの産婦人科医、オーストリア生まれの **George Gellhorn** の娘で、米国でも才媛の集まる **Bryn Mawr College** を卒業した後、すでに作家としての道を歩み出していた。両者の出会いは、1936年12月、キー・ウェストの彼の行きつけの **Sloppy Joe's** においてであった。**Martha** は母親と弟の三人でマイアミからやって来たのであった。母親と弟が去った後も彼女はキー・ウェストに留まり、結局1月まで滞在し、周囲の心配をよそに両者の親交は急速に深まった。彼女が1月中旬にキー・ウェストを発った後、ほとんどあとを追うように **Hemingway** もニューヨークへ向けて発ち、マイアミでデートをすることになる。1937年3月、スペイン内戦の取材のために現地へ赴いた時、たまたま **Martha** も他の特派員にまじって現地へ来ていた。1月以来の再会であり、両者はスペインで行動を共にすることが多くなった。映画「スペインの大地」を **Roosevelt** 大統領夫妻が鑑賞するに至る段取りは、大統領夫人と親交のあった **Martha** が行なったものである。

1937年の暮、両者がカタロニアでひっそりとクリスマスをおしている間に **Pauline** はパリにやって来て、更に、夫の様子を見るためにスペインまで足をのばすつもりであった。しかし、年が明ける早々に彼の方がパリへもどって来た。二人は合流して投宿することになるが、**Martha** との問題は次第に夫婦の間で深刻なものとなって行った。1938年3月、**NANA** との6週間の契約で再びスペインへ渡り、5月中旬にはパリへもどって来た。当時 **Martha** はパリに滞在していた。一旦キー・ウェストへもどった **Hemingway** は、8月に例によってワイオミングへ出かけるが長くとどまらず、月末には **Martha** の居るパリへ走った。短いワイオミング滞在中に彼は *The Fifth Column* の序文の原稿を仕上げるが、原稿では、この書物は **Pauline** にではなく **Martha** と **Herbert Mathews** に捧げることになっていた。

年が明けて帰国し、4月にはハヴァナで **Martha** と出会い、共に後の彼等の根拠地となる住居をハバナの中心部から約15マイル程離れたサンフランシスコ・デ・パウラに買い求めることになる。この頃すでに **Pauline** との生活は事実上決裂していた。9月には彼が以前から予言していた通り欧州大戦が起こったが、彼はワイオミングを払って **Martha** と共にサン・ヴァレーのロッジに移った。この年のクリスマスは、**Pauline** や子供達が引き払ったあとのキー・ウェストで過ごし、淋しいものであった。

V

Hemingway の目指していたものは、理想的な散文の追求ということであった。**Kandisky** は、“You see, he is really serious about something. I knew he must be serious on something besides kudu.”³⁶⁾ と言う。その“something”とは、“The kind of writing that can be done. How far prose can be carried if anyone is serious enough and has luck. There is a fourth and fifth dimension that can be gotten.”³⁷⁾ と言われているように、散文の可能性を追求することにあつたのである。それは詩よりも困難なもので、まだ一度も書かれたことのない散文である。**Hemingway** は、このような新しいタイプの散文が、作家の原体験をトリックや「まやかし」なしに書けば可能な筈であると信じていた。そして、そのようにして生まれた作品は、いかなる体制のもとにあっても十分評価に耐え得るものであることを信じていた。しかし、これが実現するためにはそれ相当の条件が必要である。なるほど「運」も必要である。しかし、基本的に必要な作家の条件とは、先ず才能である。それは **Kipling** のような才能でなければならない。更には **Flaubert** が努力したような修業鍛練というものが必要である。これらに加えて、絶対不変の良心、豊かな知性、公正さ、生き抜く強靱さ、等々が必要となる³⁸⁾。

36) *Green Hills of Africa*, Jonathan Cape, London, 1962, p. 32.

37) *Ibid.*, p. 33.

38) *Cf. Ibid.*, p. 33.

Hemingway にとって散文とは “Prose is architecture, not interior decoration.”³⁹⁾ と言うように決して “plums in a pudding”⁴⁰⁾ のようにレトリックによって実体が包まれ、飾られてはならないものであった。彼の作家の条件は完全主義であり、もし本気でこれを追求しようとすれば人間は精神的破綻をきたすであろう。事実、Hemingway にとって作品を書くことは、*“soul-searing process, accomplished indoors with the instruments of his trade, a self-imposed imprisonment”*⁴¹⁾ であり、先に引用したごとく真剣でなければ果たし得ない業であった。作品を書くことに勝る喜びはないと彼は言う。しかし、命を賭けて作品を書き、その出来栄えが本意な場合、気も狂わんばかりの精神状態を救おうと思えば、大海や森林に出て行く他はないと述懐している⁴²⁾。釣や狩猟は幼少の時から彼がその中に大きな喜びを見出して来たスポーツであった。確かに、大自然の中で獲物を追う時の爽快さは何物にも比べ難いものであろう。しかし、Hemingway にとってはこれらの野外スポーツはもはや楽しみのためののみあるのではなく、不可欠の “antidote” となっていたわけである。彼にとっては今や物を書くか、釣や狩猟をするか、それとも自殺するか、三つに一つという状態であった。

Since he was a young boy he has cared greatly for fishing and shooting. If he had not spent so much time at them..... he might have written much more. On the other hand, he might have shot himself.⁴³⁾

1933年、待望のアフリカに出かけたが、帰国後1935年に *Green Hills of Africa* を出し、続いて翌年8月、*Esquire* 誌に “The Snows of Kilimanjaro” を、又、9月には *Cosmopolitan*

誌に “The Short Happy Life of Francis Macomber” を発表した。いずれもアフリカ旅行の中にその材題を求めたものであるが、両者とも従来の生き方からの脱皮を目指している点は興味深いところである。Macomber にとっては、勇気を得たことによって新しい喜びと幸福がおとずれるが、それを味わうにはあまりにも短い時間しか許されなかった。又、“The Snows of Kilimanjaro” における主人公は、作家として再出発する為にアフリカにやって来たのであったが、右脚に壊疽ができて命を落すことになる。この二つの作品には当時のスランプに陥入っていた Hemingway 自身の克闘がその基本となって描写されている。自殺には大いに関心があると書き⁴⁴⁾、又、“Death is a sovereign remedy for all misfortunes.....”⁴⁵⁾ と書いた Hemingway は実生活においてもしばしば自殺について言及している⁴⁶⁾。純白に輝くキリマンジャロの頂きを見て、主人公はこれこそ自分が行こうとしている所だと思う。Hemingway 自身の目指す所、それは新しい散文学の確立という前入未踏の困難な業であった。彼はキリマンジャロの頂きに迫ってひからびた屍と化した一匹の豹に自らの姿を見ていたのかも知れない。

1933年代は Hemingway にとって私生活を含めて悩みの多い年であった。気晴らしである筈の釣や狩猟や社交は、逆に彼のジレンマを深めたようである。彼は作品を書く時の感覚的な閃きを “juice” と言っていたようであるが、彼の努力にもかかわらず豊かな “juice” は得られなかった。それは彼が作品の中に書いている “water in the well”⁴⁷⁾ のようなものであり、これが涸れると作品は駄作となる。Hemingway の悩みは、どのような状態にあっても書き続けなければならない自分の立場にあったのである。

39) *Death in the Afternoon*, p. 182.

40) *Green Hills of Africa*, p. 26.

41) *A Life Story*, p. 288.

42) Cf. *Ibid.*, p. 288.

43) Georges Schreiber, *Portraits and Self-Portraits*, Houghton Mifflin, Boston, 1936, p. 57. Hemingway 自身の寄稿文。

44) Cf. *Death in the Afternoon*, p. 25.

45) *Ibid.*, p. 102.

46) 拙稿「Ernest Hemingway の自殺をめぐる」関西学院大学社会学部紀要第30号、1975、参照。

47) *Green Hills of Africa*, p. 30.

I must write because if I do not write a certain amount I do not enjoy the rest of my life⁴⁸⁾

と言う言葉はいみじくもこの間の事情を伝えている。彼は以前に、自分の好きなことだけを楽しみながらやるのだと腹立ちまぎれに言ったことがあるが⁴⁹⁾、彼の望んでいたことは、“To write as well as I can and learn as I go along.”⁵⁰⁾であった。しかしながら、このことがいかに困難な業であるかと言うことは本人自身が身をもって体験していたことであった。スクリブナー社と関係のある女流作家 Mrs. Rawlings は、Hemingway が抱えている問題は、“inner conflict between the sporting life and the literary life ; between sporting people and the artist.”⁵¹⁾と見てとった。彼女は、Hemingway 達と共に過したバハマ諸島のビミニでの体験から、スポーツを楽しむ人々と文学者との間には、人生に対する

基本的な態度において相入れない側面があることを知った。彼女に言わせれば、“They enjoy life immensely, yet without being sensitive to it.”⁵²⁾と言うことになる。Hemingway はスポーツマンとしても専門家であったが、一方に力を注ぐことにより他方が損われることを絶えず意識していた。作家を台なしにするのは政治、女、酒、金⁵³⁾、それに加えて批評家⁵⁴⁾であると言う時、そこには1933年代における彼の悩みが浮き彫りにされているように思われる。A Farewell to Arms の作家として華々しく迎えた1933年代であったが、苦難の10年間であった。さまざまな周囲の状況にもかかわらず、絶えず果敢に作品に取り組み挑戦していった彼の態度は十分敬服に値するものであった。満身瘡痍となった彼の不屈の努力は、新しい年代の幕明けである1940年10月に出版された *For Whom the Bell Tolls* において見事に報われることとなるのである。

48) Ibid., p. 31.

49) 本稿注20参照。

50) *Green Hills of Africa*, p. 31.

51), 52) *A Life Story*, p. 288.

53) *Green Hills of Africa*, p. 34.

54) Ibid., p. 30.